

黒髪

泉鏡花作

一

毎夜、と云つて、一年三百六十五日、缺かさず夜ふかしをするでもないが、久しい間、悪い癖で、夜中二時三時頃までは、寢床に潜りつゝも大概目を覺まして居る。―― 何うかすると、夜が明けて、其の日の新聞を讀んで、それから寝る事も稀ではない。

番町は邸町で、寂しいと云つても、それでも、まるで人あしの戸外に途絶えるのは……陽氣にも困るが、たゞ一時か、半時ぐらゐなものである。所謂草木も眠り、流の水も絶えて、屋の棟が下ると言ふ刻限が過ぎると、他土地は知らず、此の邊は牛乳屋が箱車を曳いて通るそれが鐘の音よりも枕に響く、と最う東が白むに程がない。これが不斷の例である。が、其の一時、寂莫と、降るもの、吹くものは別として……ひっそりと静まり返る間に、夜毎に聞える、ものゝ不思議な聲がある

る。・・・不思議と云ふのは、偶と心着いてか  
らの事で、其なり聞流せば何、何でも無い、冴えた、  
うら若い、婦人の聲である・・・夜半二時から  
三三時の、凡そ其の半ばと思ふに、屹と町を通る婦  
人の聲で、二人かと思ふ夜もあり、三人かと思ふ事  
もあるが、何を言ふのか、それは聞き取れない。尤  
も聞き取れないくらいなれば、二人、三人と數へるの  
さへ、一體は覺束ないので。

唯、わや／＼入亂れた話聲を・・・わや／  
＼・・・とまあ記るものゝ、實は、其では些と  
騒々しい。はら／＼と、木の葉が揺れるか、花が囁  
くか、雲霧が摺れ合ふかと思ふ、取留めのない、恁  
う、散るか、溢れるらしいのが、一度風に乗つて、  
巴か朶に撓据わつて、はつと、其の聲の持ぬしの、  
二三尺身のまはりへ、ゆら／＼と成つて擴が  
る・・・氣勢がして、忽ち消える・・・と  
思ふと同時に、

「ほ／＼ほ／＼。」と、笑つて行く。――

又此の笑聲が、それは／＼顯若く、色に出るばかり

り鮮明なもので、夜中で、木にも草にも、屋根にも、町にも、濃い薄い隈のほか、月にだつて、何の色彩もない、と思ふ所爲か、分けて暗夜と知つた時なぞは、颯と、赤い、蒼が口を明けたかとも聞れゝば、もみぢを掌から撒くかとも聞える。ちら／＼花が咲くやうに思はれるのは・・・今住む家の向う側に、黒板塀の裡に櫻の樹があるため。

「ほゝゝ。」とソレ其處へ、・・・冬は枯葉に灯す紅・・・春は霞の薄紅梅、月影には紫にして、輝く星には碧であらう。

が、それは笑聲で、もの言ふらしい、今のはら／＼は、樺に、茶に、色がぼやけて、何となく、ほの煙る。・・・こゝで氣が着けば、陽炎がものを言ふに似て居るのである。

で、葉にも花にも、長閑な折ふし、静な場合はそれ迄だが、五月雨が續いてじと／＼と降りくだつ頃などは、梢へ咲かず地に流れて、垂々と血かなんぞ染むやうだし、凄いののは、風が強く、ひゆう／＼と耳を貫くと一齊に來ると、あの、その笑ふホホホ

がニと火の粉に散つて、軒をキリノと飛びさうで、思はず岸破と刎起きると、其のまゝフツと消えて、やがて、一町ばかり隔つた四辻のあたりで聲音が力ランと響く。また、そんな時に限つて、枕に俯向いて耳を澄まして居ても、遙に夜廻りの拍子木も響かなければ、頼母しかるべき密行の警官の沈んだ靴音もせぬ。取出で、これは或特別の場合を記憶のまゝに言つたので、はら／＼と聲で、さて、笑つて、ツイと遠のいて、聲音の響くのは、何時の夜も違はぬのである。

考へると、二人か、三人と言ふのは、それは唯思ふだけで、何うも、怪しく夜行する婦人は、唯一人が眞個らしい。とすると・・・はら／＼と散る話聲は、誰に聞かすのか、誰が聞くのか、獨言ではよもあるまい。妙に取れば其の婦人の耳に、――丁ど其の聲のする――空中から、（・・・として見れば形も足もないものに成るが、・・・其の婦が、物を言ふのが、洩れて此方の耳に響くかとも疑はれる。

以前、同じ土地の土手に住んだ時は、家の横に細い坂があつた。――同じ時刻に、寂しい其の坂の中途と思ふ處で、聲あつて、必ず笑ふのが殆ど毎夜で、これが約一年半。

現在の番地へ越して來てから、五六年の間、此方が眠つて居ない間に、斷じて聞洩らした覚えはない、丁ど其の塀について、櫻の下を笑つて通る。

私は――と此の話をする男が、更めて言ふのである。――

「密娼が稼ぎの歸送、と思つたのが最初で。やがて、狂人の夜あるき、と言ふ……まで、後續く分別が一寸ない。一寸どころか、まるで無い。

私も然うだが、誰に話しても、同じ事か、然うでなければ、まさかと言ふ。のつけから嘘にして信じないものも多い。それも尤で、事實とすれば、密娼か、狂人としなければ成らぬのであるが、其のいづれにしても、永い年月を、われらに夜があると齊しく、絶えず打續くと云ふ法はなからう。

「夏の頃、門の納涼臺では、またはじまつた星の論で、毎年此の話が出ると、

「一つ駮して見ますか。」

「と、宵の内は誰も言ふが、全然信じないのは別として、半信半疑な人々も、つい眞夜中であるが故に聞き漏らす……」

「成程聞きましたよ、變ですな。」と云ふのもあつた。けれども、窓を開けたり、門に立つたりし

て、其の姿を視たほどの好事者は只の一人も無い。

然う言ふ肝心の當人が、今夜こそは、と随分根較  
べも爲兼ねない氣で、サテ掛るが、出窓の前に居据  
つて待つても、二階の戸越に立つて居ても、寢床で、  
うむ、と氣構へても、いざと成ると、我ながら、魂  
萎え、心疲れて、狸が尻尾で敲くの合圖に、戸を  
ぐわらりと云ふ寸法には行かないので、まだ矢張り、  
聲だけを聞いて、獨りで不思議に思つて居る。が長  
いうちには其の不思議にも馴れて、夜鴉が暗くくら  
みにしか氣に掛らぬ。但其の聲には色がある。蒼が、  
花が、紅が、紫が、碧がある。流るゝ血がある。ほ  
とばしる火の粉がある。

惟ふに、見た處で、形はあるまい。姿もなからう。  
氣の迷ひであらう。癖に成つて、現に、私だけが聲  
を聞くのだと思へば濟む。

冬の小春日の日中、二時頃であつた。――夜だ  
と同じ刻限だが。――其の白晝に、市ヶ谷見附か  
ら士官學校、津の守坂の下通、田町を通つて新宿の

大木戸へ出た事がある、杖一本の散策。

崩れた石垣も、魚屋の鮭の切身も、太陽の恩恵には漏れないで、松も、銀杏も、ほか／＼と暖かつた。車の輪にも光あり、飴屋に集つた小兒等の背には、何うやら美しい羽でも生えさうな陽気で、辻便所わきの日溜りには、土方が四五人、仰向けに成つて足を伸ばして居るなど、そして、碧の空には淡く象嵌した晝の月、枯柳には薄く紅がさす。

やがて、坂町の坂の下で、ぶら／＼歩行きの用もなしに、古道具屋　ー　と云　つても骨董品ではない、鍋釜ぐるみ、破れ箆笥、羅紗の紙入、根附の類。然うかと思ふと、ちぎれた具足などを飾つた小店に、陽の線でむら／＼と綺麗な塵埃が舞を舞ふ中を、フト覗くと、壁に建掛けて、疊んだりの古屏風の上に、國芳のかと思ふ、三枚續きの錦繪があつた。長刀小脇に十二重緋の袴の瀧夜叉姫。白の振袖、緋縮緬、捌髪で蜘蛛の魔法は大友の若菜姫。自来也の綱手。弓張月の白縫姫。本郷四丁目の名代娘。婀娜に、艶に、凄いのが、まだ四人ばかり面影に立



つた。が、續き畫が奥に残つて、店口からは斜に深くてよく見えない。古今名婦傳と題してある。

一粒選の姉さんたち、先方は御存じではないけれども、此方で馴染の深い事は、なか／＼以て、懐中の勘定しながら、戦々兢兢々でお酌を願ふ藝妓の如き、縁の薄いものではない。

あゝ、うけ口なのが婀娜つぽく眉を顰めた。煤にむせて嚏をしさうで打棄つては通られぬ。

「御免なさいよ。」

「……はい。」と、やゝあつて、奥から忙しさうに出て来たのは四十ばかりの女房で、小さな鬚に毛筋棒を突さして、白い前垂をしめたのは、髪結らしい。

「宿か留守でございますから。」

畫の値段を訊いたのに答へたのが、此で。そして賣りものでは無からう。其の次第は、壁に糊づけに成つて居て、一寸めくれないのだと言ふ。何うだら

う、少しくらゐは損じても、はがしてくれる事は成るまいか、と言ふと、

「唯今、髪を結ひかけて居りますから、お生憎様でございますよ、はい。」

其癖、近頃越して来た自分たちより先に、此の繪は壁にあつたなど、饒舌つて、又忙しさうに横向の捨會釋。

「お生憎様でございました。」

や、軒の蜘蛛の巣に日が當ると、繪の白無垢を、はつと浮かせて、若菜姫が雪なす襟から、さら／＼と繰出すやうだ。と見ると、赤い半襟でお七が莞爾と其の絲の蔭から笑ふ。……串戯ではない。溝端の落葉がむく／＼と……あれ串戯ではない。蝦蟆もたがりに動くのを、ひよいと跨いで、此方も苦笑をしたのである。

「皆さん、失禮。」

随分長い、あの、だら／＼坂へ上りかゝると、一時人通りに交つて、大木戸から散つて下りる車、荷車の数が多し。曳く其の馬だが、上から来るのを、上りしなの下から見て正面に打つかると、今にはじめぬぬ、いや何うも長い面が、坂なぞへの家並の廂を、ぬツと扱いて、鬘が屋根に戦ぐ。

と盲目が十六の時、目が開いて、はじめて此の獣を見て吃驚したやうな心持がして、上つて行く――坂の上角は、眞向に大木戸の火の見階子を見て、彼處は三叉に成つて居る……初めて通つたので――町名は後に覺えたが――一方が四谷ながすみちやう、片側が新宿の北裏町で、坂の上にもう一筋牛込の方へ通ふ町があつて、英字のKと云ふ形、古い譬喩が刺叉に成る。家並が町より低く、道が、こんもり高い處へ、坂の上の角は、ト見ると丘の上か、と思ふ……丁ど其の三叉の處に、下から上がらうとする私が見て、眞正面の日南に、湯歸りかと思える、のんびりとした姿で、我が家の廊下にも

「イんだ容子の繕はない、ありのまゝの、すらりと懐  
手で、衣服が、と覺えたのは、薄青い處へ、恚う、  
銀色を帯びた、（無理な相談ではあるが、何か月  
影を、其のまゝ日當へ持つて出て、とろ／＼と溶か  
したのが、立所に其の色の霧に成つて纏つた、・  
・・とまあ、思つて頂きたい。と云ふうちに、お  
讀みの方は、此の婦人の背丈が分りますか、分りま  
すまい。・・・分らぬ譯で、御覽に成つたので  
はないから――不思議な事には、私は其の姿を  
一目で、おそろしく脊の高い婦だと思つた。いや、  
思つたでは濟まぬ、實際見たのであるが。」

「おや／＼・・・」と思はず獨言を云つた  
――凡そ何のくらの脊丈であつたらう、と其  
處等の兩側の屋根と、二階家と、軒の看板と、電信  
柱を、肩と思ひ、胸と思つて、茫然として見上げ見  
下ろしたのは、蓋し、擦違つて、通過ぎて、蹴躓づ  
くまで、はツと思つて、ぐるりと振返つてあとを視  
た時で。私は大木戸の方へ七八歩・・・唯、最  
う、三叉の其の何處へ行つたか其の婦は影もなかつ  
た。

駈戻つて覗いたら、どの横町へか曲つて――  
ふら／＼と行くのが見えたかも知れぬが、人の魅せられた時は希有のもので、然うする心も出なかつた。

髪かみの黒くろさよ、輝かざく艶つや、肩かたへ颯さつと……頸くびを細ほそ  
りと髻もとくりゆ結むすつて捌さ髪かみにしたのが、さながら蓑みのを被かついだ  
かと房ふつさりして、眞ま日向ひなたに向むかひながら玉たまなす縹き緻めの美うつくし  
さ。抜ぬけるほど色いろの白しろい、遠山とほやまの眉まゆと云いふのが、霞かすみ  
に浮ういて、ぽつと濃こく、やゝ俯うつむ向き加減かげんの、鼻筋はなすぢが  
通とほつて、心持こころもち、片頬かたほへ歪ゆがめた朱しゆの唇くちびるの口許くちもとに微笑ゑみを  
含ふくんで、半なかば伏目ふしめの、あゝ、睫毛まつげを二みいたら、海うみも  
山やまもたゞ芥子粒けしつぶに成なつて入りさうな黒くろい瞳ひとみと視み  
た……顔かほは大きおほかつた。――

「一寸お尋ね申したいのですが、彼の坂は何と云  
ふんでせう。」

「へい、何です。」  
聞きかれた男をとこは、私わたしの問とひを解とき兼ねたのであつた。  
鳥打帽とりうちぼうを横よこちよに被かぶつた、それは炭屋すみやの若わかい衆しゆで。

「彼處あそこに、坂さかがありませう。あの坂さかには、何坂なにさかと

か云ふ名がないでせうか、御存じではありませんか。  
「

「解りませんな。ーちえツ。」と言つた。

私は突落されたやうにハツと思つた。そして極りが悪かつた。大方、其處等を、うる／＼して、狐憑とでも見えたであらう。

片側町は、早や陰つて、横倒しに映る家々の屋根の影に、陽の色が赤くなつて浸んだ。

あれ／＼！ 火の見の階子を下から手繰るやうにする／＼と人が昇る、と見ると、角の日溜りに智慧の輪を賣る露店があつて、取巻いた人数が、地ぐるみ投出された形で、みな階子の下へ飛んだ。

火は早稲田であつた。

其の翌年二月半ばの事である。

白晝、矢張り同じほどの時間に、芝の伊皿子に用があつて、歸途に札の辻から乗つた上野行の電車の中に、其の・・・と云ふのも、不思議な氣がする。其の坂の三又で視たと同じ婦人、と云ふまで、

前の時の顔容に、判然とした見覚えはなかつたが、  
何故か自分では然うに達ひないと思はれる・・・  
色の抜るほど白い目鼻立ちのきつぱりした、まつた  
うに眞向きで、衰の如く黒髪を捌いたのが、芥子よ  
りは微細な塵埃の一つ一つ舞ふのが金色に光つて見  
える、明い窓に、左右に幅廣と云ふより前後に分厚  
な姿で、向つて左側の丁ど眞中あたりに懐手して腰  
を掛けて居た。唯見た處が、普通の女、寧ろ男の、  
脊丈にも幅にも二層倍は確にある、大きな白い幽靈  
である。黒繻子かと思ふ丸帯をしめた・・・

其の妙なのは、然うして、確に男の二人ぶり是有  
と思ふ身幅にも係はらず、一々人数を讀んで見た  
わけではないが、心づもりに、細りと座を取つて、  
左右へ少しも障らず、前後に聊も幅つたくない。――  
露月町で下りた。下りる時見ると、髪の毛が恰も  
天井に届いて一杯に成つて、身幅も、通る處左右へ  
一杯に成つた。あつと思ふと、可加減に扉だけの丈  
にかはつて、づつと車掌臺へ出て、それ立つた。と  
たんに一大事が起つたのであるが――

殆ど奇蹟だつたのは、大宇宙は循環し、もの事は繰返すと聞けば、電車に何年目に一度づつ、こんな事があるか、尋ねて見たい。釣革に立つもの一人もなく、然ればとて左右に空席は一ヶ所もなく、所々で客の上下するたびに、水を量るばかり、整然として一並びに成つた。で、下りた時も、其の婦唯一人で、路は坦々として大道の如しであつた。

私は宙へ釣られるやうな心地がしつゝ、右側の端から、幾度も伺つたが、恚う、何う身體を扱つて、人を垣に遣直しても、透かす毎に、何の方へも、婦人はきちんと私の目に眞正面に、ひたりと向ふので、面影ばかり、しげ／＼と、睫毛までは、まぶしくつて視つめられなかつたのである。・・・

車掌臺へ出た。――立つて下りかけたと思ふと、其の勢だから背丈が空を貫く電信柱の尖までは届いたらう。が、ドンと留つて、車はじり／＼に二三間逆に戻つた。救助網を下からなぐりつけて、唯何の事はない、大煙突を横に打倒したやうな黒煙が地面へ渦を巻いて吹掛ける、と箕で煽る如き炎が、めり



／＼と其處そこの家の軒のきを嘗なめた。

把手ハンドルを握にぎつた其そのの時ときの車掌しやしやうの形かたちは、暴風雨あらしの船ふねから、遠く幽とほかに、屹立きつりつした燈明臺とうみやうだいを望のぞむが如ごときものであつた。

四

私に、恚う云ふことを話した人がある。

「其の人は、例の吉原の大焼の時、公園から廓内を見つゝ立つた。……最う其時は、水道尻から大門——門は既に煙の裡に大蛇の蟠る如く崩れて居た——まで仲の町は、唯これ白晝の火と風であつた。火の響、風の音ばかりで、寂然として人一人の影もない。障子、襖が其の空を、焼けつゝ、木の葉の如く飛び、飛びつゝ、打撞つて、ばら／＼と炎を散らす。……突然熊蜂が吹飛ばされたやうに、あれ／＼と云ふ角町邊の曲角から吐出されだが、半纏腹掛の若いもので、磨硝子を嵌めた雨戸を一枚擔いで居る、慌てたらしい、公園を目的に飛んで来たが、丁ど、屋根へドツと燃抜ける、もとの兵庫屋の前で、蒲團のかゝつたまゝ投出されてあつた炬燵檜に蹴躓くと、もんどりを打つて、板戸ぐるみ引くりかへると、手足も顔も血だらけに成つた、硝子が毀れた怪我である。それなのに、四這ひに這ひながら、丹念に一箇づゝ、其の磨硝子の缺片を拾ひはじめた。

危あぶない、止よせ、危あぶない、と公園こうえんで人ひとの喚わめくのも耳みみに入いれずに、――

いま、其その若わかいものが駈かけた、矢張やっばり角町すみちやうの角かどから出でたと思おもふ……仲なかの町ちやうの眞中まんなかを、水色みづいろの部屋へや着ぎで、下髪さげがみで、色いろの雪ゆきのやうに白しろい、脊せの高たかい遊女いうぢよが一人ひとり、澄すまして褌つまを取とつて、左右さいうが炎ほのほの仲なかの町ちやうを、繪ゑのやうに通とほつて來くる。遁迷にげまよつた最後さいごの一人ひとりであらう、と見みたが、悠々いゆう／＼としたもので、夜中よなかに肅しゆく然ぜんとして長廊下ながらうかを渡わたる態たいど度どがあつて、火ひぐるみ煙けむりが其その姿すがたを包つゝんでも、ひとへに炎ほのほの龍りゆうのそれが、襦うちかけに見みえやう。……風采ふうさいと氣位きくらあが今時いまどきの妓きんでない。吉原よしはらの地主神ぢしゆじんとして何百年なんねんか地ぢの底そこに眠ねむつたのが、此この大火たいくわに、目めを醒さまして、と小ちひさな欠伸あくびで、

「おゝ、明あかるい。」か何なにかで、すら／＼と仲なかの町ちやうへ出掛でかけたらしい。淀よどみもせず、急いそぎもせず、すつと來きて、件くだんの這はひ身みに硝子がらすを拾ひろふ若わかいもの、傍通そばとほつた時は、裳もすそが、楓きつと瀧たきのやうに落おちかゝつた水みづの影かげに、半纏はんてんぎ着ぎは、山椒魚さんせううをが泳およぐやうに見みえた――と言いふのであつた。

公園こうえんの人ひとごみへ入はつた、と思おもふと、もう何處どこを探さがしても、それらしい姿すがたはなかつた。

大正五年九月三十日、満月の夜より、翌朔日の未  
 明を襲つた眞夜中頃の東京の颱風は、．．．大  
 江戸にも嘗てなかつた、或は有史以來と稱ふる未曾  
 有の天變であつた。

全部到る處、就中、深川一帯、月島砂村の海嘯の  
 大惨事は、尚ほ人の耳、われらの記憶に新なる處で  
 ある。

山の手に、怪訝な事があつた。――

麹町九丁目の通りの、或米屋の主人が葺戸の透間  
 から覗いたのであるが、あれまでの風雨の中でも戸  
 外は朧に明かつた。明い、と云つても、何か、冥途  
 の明さのやうで、たよらない、もの凄いい寂い、可恐  
 い、覺束ない明ではあつたが。ものゝ黑白は、よく  
 辨ずる、魔界の光ともたとへられようか、毒龍の鱗  
 の炎、惡鬼の眼の輝に映し出されたとも思はれる。

主人は此を話す時、串戯らしいが、大蛇に吞まれて、其の腹の中に居ながら、奴が、谷と言はず、峰と言はず、のたくり歩行くまゝに、輾けつ轉びつしながら蛇肉を通す、娑婆の明で見たやうなものだと言ふのである、―― 實際蒸暑かつた。――

一間、八尺の屋根看板は、鬼が廣目屋をするやうに、すた／＼と空を駈け、軒燈は幾つとなく、魍魎に、素首を刎ねられた如く、血の青い尾を曳いて宙を飛ぶ。

唯、此の米屋の軒下から、大八車が一臺がた／＼がた／＼と丑満頃に目を覺まして、がたんと大欠伸をした形で、一つ上下に楫を振ると、溝板を眞直に大通りの眞申さして、のツこん／＼と出て行く。

向うに横町がある。―― 其の角で、頭突きに、トンと一つ楫を突いて、上へ、がつくんと上つて、ドンと云つて、同じ荷車が、同じ大通の眞中に向つて、腹を擦つて煽つて出て来る。

誘はれたらしい形で、其の角の菓子屋の軒下から、箱車が、ひよこんと飛んで、不状に、兩輪を蠡斯の如くに突張つて、またヒヨイと飛出す。

出る、一軒隣の洗濯屋から出る、斜向の麵麩屋から出る。……来た／＼来た！半藏門の方から、ハツ／＼ハツ／＼楫で呼吸をして喘いで来た。構の上で、空廻りをして、とんぼを切つて、チャリオンと舞つて、キリ／＼吹寄せられたのは、戸惑をした自転車である。或は速く、ぐわら／＼ぐわら／＼と、紀尾井町の坂あたりを、駈上るかと思ふ響きがある。

をかしたものは、破車で、街樹をたよりに、ひよツくらと横あるき。

で、仇白い、雨水の小浪を立てる大通へ、あとから／＼、湧いて出て、二十七まで数へたが、やがて五十臺の上はあつたらう……

「や、何うだ。」

「此の體は。」

「何うにも、恚うにも。」

「話のやうだ。」

巫山戯た奴等が、唯先づ行儀よく楫をついて、各々  
挨拶でもするやうだつけーむく／＼むく／＼  
と煽りを切つて輪を立てるい、と一所に充ち満ち  
つゝ、とち狂ふわ、駈廻るわ、躍上る、のめずり出  
す。ストーンと仰向けに、ひツくり返つて、わツはツ  
／＼と笑ふのがあると、逆ニ斗を打つてキヤツ／＼  
と燥ぐ。畝る、波打つ、にる、廻る。

あら／＼到頭、あんな事をはじめた。荷車の中で  
も間のびのしたのが、二臺、両方からドンと當ると、  
ぐら／＼と體に鱗立たせて、引組んで、嚙合つて、  
ずんと天上に突立上る、と自轉車めが、から／＼と  
一臺の其の脊筋の所へ舞上つた。かと思見ると、颯と、  
木の葉で、ものゝ一町ばかり退くかと思へば、もの  
凄じい地響き打つて、兩箇の荷車は両方へ、躍つて  
仰向けに、打覆つた。

煽を喰つて、哄と退く。其處に寄集つた夥多の車



が、礫つぶてのやうに、ぐわツと散ちる時とき、樹きは倒たふれる、屋や根ねは崩くづるゝ、看板かんばんは走はしる、瓦斯燈がすとうは飛とぶ、瓦かはらは數かずを知らしず。椋鳥むくどりは大群たいぐんをなして風かぜに散ちつた。

唯と一呼い吸きつくと、惡寂わるさみしく、けつたるさうに、荷にく車るまがなま欠伸あくびを大おほきくして、たゞきつけられた所ところから、ごツとんと發足ほつそくする。と、向むかうでドンと楫かぢを突ついて、更あらためて……いや、今度こんどは早はやい、見みるノうちだに三十四五臺だい。

此處へ、新宿邊から出たのであらう。轡頭を確乎と取つて、馬方が一人、大八車を曳いて來掛つた。積んだのは、石灰だつたとも、炭だつたとも言つて、定かでない。如法の暴風雨の中を乗切つて來た勇氣は、敗軍のあとを、唯一騎、砲車を曳いて殿するにも劣るまい。

「どう、どう、どう！」

其の聲は一步づゝ、しかし、土を踏んで、柱で胴突きをするやうである。

と思ひながら、吹なぐる風に馬も、馬方も、たゞ宙に釣られて、打揚火花から出たやうに、ふら／＼として通るぞ、と其の米屋の目に見えた。

矢よりも疾く、空を飛ぶ雲の色は眞白である。黒雲も、灰汁の雨も、餘りの風の激しさに、磨研かれずに相違ない、所々、輝く白銀の光が交つた、其の上を颯と渦を捲いて、薄紅い桃色の雲が走ると、此に萌黄の電光が、キリ／＼と搦んで燦々と燃えるの

が、瞬<sup>またん</sup>く間に消<sup>き</sup>え、且<sup>か</sup>つ輝<sup>かぎや</sup>いて、天地<sup>てんち</sup>は燦<sup>さんらん</sup>爛<sup>らん</sup>たる、  
其<sup>そ</sup>の大<sup>おほ</sup>踏<sup>たづら</sup>鞞<sup>ら</sup>を蹈<sup>ふ</sup>む。

凄<sup>すこ</sup>い影<sup>かげ</sup>は、横<sup>よこ</sup>状<sup>ぎま</sup>に迸<sup>ほとばし</sup>る熱<sup>あつ</sup>い雨<sup>あめ</sup>を切<sup>き</sup>つて、波<sup>な</sup>打<sup>み</sup>つ地<sup>ち</sup>  
に倒<sup>さか</sup>に映<sup>うつ</sup>つては、粉<sup>こ</sup>に成<sup>な</sup>つて繁<sup>し</sup>吹<sup>ぶ</sup>きに飛<sup>と</sup>ぶ時<sup>とき</sup>、鬼<sup>おに</sup>の車<sup>くるま</sup>  
の其<sup>そ</sup>の演<sup>えん</sup>戯<sup>ぎ</sup>は、今<sup>け</sup>日<sup>ふ</sup>の悲<sup>ひ</sup>劇<sup>げき</sup>を大<sup>おほ</sup>棧<sup>さ</sup>敷<sup>じ</sup>で御<sup>ご</sup>見<sup>けん</sup>物<sup>ぶつ</sup>の魔<sup>ま</sup>王<sup>わう</sup>  
の手<sup>て</sup>から、衝<sup>つ</sup>と花<sup>は</sup>束<sup>な</sup>を投<sup>な</sup>げられたのであつた。

雲<sup>くも</sup>と、其<sup>そ</sup>の電<sup>でん</sup>光<sup>くわう</sup>と凝<sup>こ</sup>つて紫<sup>むら</sup>に彩<sup>いろ</sup>られて、車<sup>くるま</sup>が三<sup>さん</sup>臺<sup>だい</sup>  
—— 今<sup>こん</sup>度<sup>ど</sup>は數<sup>かず</sup>を増<sup>ま</sup>した —— ぐわら／＼と鳴<sup>な</sup>  
つて六<sup>む</sup>ツの輪<sup>わ</sup>を、中<sup>なか</sup>空<sup>そら</sup>で高<sup>たか</sup>く躍<sup>をどり</sup>上<sup>あ</sup>つた時<sup>とき</sup>である。

油<sup>あぶら</sup>のやうな光<sup>ひか</sup>る馬<sup>うま</sup>が、じり／＼と退<sup>し</sup>る、と馬<sup>うま</sup>方<sup>かた</sup>が  
蹴<sup>け</sup>鞠<sup>まり</sup>のやうに成<sup>な</sup>つて米<sup>こめ</sup>屋<sup>や</sup>の軒<sup>のき</sup>下<sup>した</sup>に飛<sup>と</sup>込<sup>び</sup>む、とたんに、  
どゞど、と二三<sup>げん</sup>間<sup>げん</sup>、向<sup>む</sup>つて、半<sup>はん</sup>藏<sup>ざう</sup>門<sup>もん</sup>の方<sup>ほう</sup>へ、前<sup>まへ</sup>脚<sup>あし</sup>を  
衝<sup>つ</sup>々と出<sup>で</sup>たと見<sup>み</sup>ると、雲<sup>くも</sup>の白<sup>しろ</sup>泡<sup>あわ</sup>噛<sup>か</sup>むばかり馬<sup>うま</sup>の首<sup>くび</sup>が  
空<sup>そら</sup>を切<sup>き</sup>つて棹<sup>さ</sup>立<sup>だ</sup>ちに成<sup>な</sup>つた。が、車<sup>くるま</sup>をブ<sup>ん</sup>と宙<sup>ちゆう</sup>に振<sup>ふ</sup>  
つた —— 可<sup>おそ</sup>恐<sup>る</sup>き風<sup>かぜ</sup>の力<sup>ちから</sup>である —— 振<sup>ふ</sup>つたか  
否<sup>いな</sup>や、逆<sup>ぎやく</sup>返<sup>がへ</sup>しに、舊<sup>もと</sup>來<sup>きた</sup>た四<sup>よつ</sup>谷<sup>や</sup>見<sup>み</sup>附<sup>つけ</sup>の方<sup>ほう</sup>へ疾<sup>しつ</sup>風<sup>ふう</sup>の如<sup>ごと</sup>く  
駈<sup>か</sup>け出<sup>だ</sup>した。

驚破と、恰も此の合圖を待つてた體に、二臺、四臺、六臺ならびに、數十臺の車ども、あの其の大八車ともに、長い橋が駈る、と見えて見附（四谷）の方へカラノと飛ぶ、と、いま打撞つて仰向けに倒れた三臺が、後れて成らじ、と叱られた體に居直つて、輪なぞはまだるい、楫を摺らせて、雨の早瀬に泳いで続く。

唯、寂然とした。

「海嘯だよう。」

うら少い婦の聲で、麹町の其處から聞いて、兩國

ー 永代、大川沿と思ふあたりで、もう一度、

「海嘯だよう ー」

と幽に聞えた・・・と同時に、・・・

窓の前の櫻街樹の梢よ、と思ふ所で、

「ほゝほゝ。」

と、女が笑つた。

飛ぶ雲の桃色も、散る電光の紫も、惟ふに、其の

笑聲の色なのであらう。

私も聞いた ー

家内中、一つ所で畏つて、屋の棟に、瀧の落つるが如き、瓦の崩るゝ音を聞きながら、電燈も瓦斯も何もない。直ぐにも消えさうな蠟燭の灯一つをたよりに、唯時過ぎよ、夜が明けよ、と、時計時計を瞬きもせず瞻つて居た、正に二時半であつたと思ふ。

戸外で、例の笑聲。

「ほゝゝほゝ。」

唯、顔を見合せた。

「恚うして居ませうか。」

顔は眞蒼であつた、家内は、腰紐を堅く、何か覺悟をして居た。

例聞く話聲は、其の夜の風であつたらう。それは聞えず、トあつて四角の跽音は、さて聞く間がなかつた。

「二階が危い、……………遁げよう、裏の平屋を頼まう。」

二人は袖で、蠟燭の灯を庇つた――  
幸に無事だつたのである。

おほどほ  
大通りでは、其笑聲そのわらひこゑがしたと同時に、きやつと云いつて馬方うまかたが氣絶きぜつした。

こめや  
米屋が介抱かいほうをして夜が明あけてから聞きくと、屋根やねよ  
り、背せの高い、色いろの白しろい婦をんなが、街樹なみきの空そらで莞爾にっこりする  
のを見みたのだ、と言いふ。

忘れもしない、——あの晩は、……然う  
 夜の十二時過ぎ、太く酔つて芝の青葉館から歸つ  
 て来た。いやはや、面目次第もないが、途中で其の

「一寸、若い衆。」

「若い衆。」

會に出入りする帳場の車夫が、ぴたりと車を留め  
 て、振り返つて、

「不可ません、旦那、……手前は、館のお  
 咲さんから堅く頼まれて参りました、確にお宅まで  
 御届け申すやうに……御覽なさいまし、町所  
 番地まで書いた、旦那の所がきまで握つて居りま  
 す。」

此の前の時は俵の上で寝て了つて、いくら聲を掛  
 けても起きなかつたさうで、車夫は言附かつた私の  
 町内へ來ながら何處へ着けて可いか見當が知れない。

一町内は寢鎮まつて居るし、持て餘して居ると、一軒、密と格子戸を開けて戸外を覗いた婦があつた。覗いたのは家内で、餘り同じ所を俾が行つたり來たりするので、もしや、と思つて開けたのだつたが。

こゝぞ、とずつと俾をつけて、

御新姐さん、御届けものを持つて參つたのでござ

います、御宅様のぢやございませうまいか。」

「どんなもの。」

「へい、えゝ、旦那ですがね。」

「まあ、」 とばかりで、

「何處から。」

「芝でございますよ。」

「あゝ、」 と言つたが、うつかり受取れない、

と言ふものは、内のだか、餘所のだか、母衣に包ま

つて居て、まるで見えない。

「まあ、一寸御覗きなすつておくんなさいまし。」

前母衣を擧げると、馬鹿野郎。

もつと手酷いがある。それと同じ晩に歸つた神田の友だちが一人、此れも拙者大酩酊と言ふ代もの



で、同じく、ぐつすりだつた處が、同じく心當の町内が皆寐込んで居て、此は又生憎と何處でも戸を開けたものがない。車夫は、撲られる覺悟で、やけに何處かの、戸を敲いて、漸く起きて顔を出した男に、  
「濟みませんが、此の旦那は、御町内何處の方だか、一寸御覽なすつて下さい、遣切れませんや」

と云ふもので、其のお咲さんと云ふ美人が、此男と懇意なため、友達効に・・・然うやつて、私は所がきまで御厚意に預かつたもの・・・

「しかし若い衆。」

「否、しかしぢやありません。斷つてと仰有るなら、此處でお下りなすつて、旦那が一人で勝手な所へおいでなさいまし。」

「面白い。」

「私は、しつかり言ひつかつて來たんです。うけ合つて參つたんですから、然うすりや空俵を曳いて、御宅まで行つて所がきだけお届け申して歸ります覺悟ですから。」

「面白い、下してくれ。」

と降り掛けたが、ふと見ると、柳が枯れた、お濠端で、お濠の水が大浪を打つ。一方は野原の吹曝し

で、何町歩行いたつて辻俵など見つかりさうな景色ではない。然も凄まじい風である、それにも母衣を掛けないほどの酔方でも、此の景色にはぎよつとして、

「此は和睦しよう、相濟まない。」

「眞個ですぜ。紙入なぞも、しつかり結へて、帯に結へつけてあるつて言つてゞしたが、可うございますか。間違ひがあると、頼まれた私が申譯がねえんですから。」

「大恐縮。」

で、曳出した。が、此の寒風に面を向けて、自若として、母衣を撥ねて居ようと云ふ加減に成ると、私は其の頃、滑稽なやうな、馬鹿しいやうな、とぼけたやうな、其癖、凄いやうな、可恐いやうな、薄気味の悪いやうな、一層のくされ、然うした方が始末の可いやうな氣がして成らなかつた。俵の上に限つた時で、然も、此の邊を通る時が最も多かつた

「――一つはそれがために、濠端を傍路へ外れようとしたのであつた。」  
「――すいと駈けて行く俵の上から、案内なしに ストンと飛ぶ、否、飛んで見たい、飛んで見たくてむず／＼するのであつ

たから。 . . . .

分けて、此の邊は、はずみを附けると、柳の梢に輪を描いて、お濠へ、どぶん！ 堪らない。が、待つてくれ、さうすりや誰方もおさらばは、知れてゐる。

實は御勝手なだけでも、 . . . . 實は未練があつて、熟と堪へて居いゝした。

其が、其夜などは、背中へ羽衣の袖を掛けて、端麗な天女が、三人ぐらゐで、すつと浮かし上げてくれさうな氣がして、我慢が仕切れぬ。それ、あれ、それ、あれ。

あゝ危い。  
と、腕を伸ばして、路の眞中を馳せて行く俵の上から、届きさうな譯はないが、心持、恚う枝に届くと思ふと、其の手が、梢に、觸る、梢に觸る、と思ふと、其の手が、水の、上を越して、向うの、石垣の、松に届く。

左の手が然うだから、右の手は、と思ふと、もう、

何處かの煉瓦造の建ものゝ二階の窓に届いて居た。  
おゝ、電信柱を越すと、胸は道幅一杯に成つて、顔  
が、今見た原中へ堆く成つたと思ふと、足が牛ケ淵  
邊にづいと伸びる。

九段坂に掛つた時は、スツ／＼スツと其の巨大な  
身體が宙に上つて、上つて、風を切つて、星が晃々  
と大きく見える・・・其の、星が、颯と、袖を  
鏤めて、私は、鎧を着た、・・・  
は可いが、一番高い電信柱に氷柱の如き穂の刺つ  
た、其の自身の槍を小脇に抱へた。

神佛の助けだと思ふ。  
此の扮装でなかつたら、私は少くとも發狂したら  
う。

坂を上つて、顔つき合せて、ハツと、目を見合つ  
たは何等のものぞ。

廣場を蔽うて、眞白に立つた、偉大なる、否、偉  
大はそぐはぬ。夜目にも著き黒髪に對しても、寧ろ  
莊嚴なる婦である。其の黒髪は、あの大村氏の銅像  
よりも、星を胸にして高かつた。

電信柱の槍取直して、犇と鎧の袖をしめると、

「ほゝゝ。」

と花か咲いたやうに笑つて、すらりと立直つたと  
思ふと、坂の上の石の常燈明が裾模様に見えて、懐  
手のうしろ姿で、九段坂に掛つたらしく、少し、低  
く成つて、すつと下りて、俎橋の郵便局の大屋根の  
時計の盤面を、婦が近視眼でもありさうに、濃い眉  
を、トさし寄せて覗いた時、下ぶくれの横顔が、霜  
よりも白かつた。海に暗礁の黒い其の大きな障に、  
針が、其の夜は零時三十分を、まざ／＼とさして居  
る。

ふつと消えた。

すつくりと、猿樂町あたり中空の棟の瓦を十五六  
軒、一齊に高く蹈んで、霜の波に、又其の姿が立つ  
た、と思ふと、残月を黒髪に懸けて、一ツ橋の方へ、  
一面に颯と影が映した。

もの凄いい女の聲で、「火事だよう……」

私は坂の上の辻車の帳場の所に蹲つて居た。

館の車夫は、何にも見なかつた。が、坂を上ると、悚然して、何故か手足が窘んで、一步も歩行かれない。同じなかまを力に、車を留めて居たのであつた。

誰も知つた、神田區の約全部を焦土に化した、大正二年二月二十日の大火の、火を發したのが、其時である。

明方新聞の號外を視ると、私は眞蒼に成つた。焼け跡を黒く塗つたのが火元を捌髪の頭にして、細腰の長い裳が、一ツ橋の堀で留まつて、黒髪の靡いた端か、其れとも帯の結目かと思ふのが、裏神保町あたり、片袖を胸の袖口の見える所が、神保町の電車の停留場に成つて、視るも艶な、婦の黒い影が、紫の蜘蛛の血を絞つたやうなインキで、ベタリと塗られて、迸つて、濃く濡々として居た。

私は普門品を稱へた。

囚に申します、當日其の號外の焼跡の圖は府下の大小新聞どの姿も殆ど同一で、中には火元と白く抜

いた形が髻結つた黒髪の頂が宛然一枚の櫛の形に成  
つて居るのさへございます。姿は少し俯向き加減の、  
髻でしめた、すんなりとした所が、猿樂町の女學校  
の所に當つて、横顔のふつくりした割に、頸の細り  
として、そしてしなやかな撫肩が――こゝに無  
限の慈悲が見えます。――東明館のあたりに成つ  
て居ります。で、もの凄いまで紅の笑聲は然ること  
ながら、優しく萎れた風采が、つゝましやかな袖口  
が、くりかへして申しますが、神保町の四辻に當り  
ます、袖口が一寸斜に出て居ます。お濠端で、くつ  
きり裾の見えるのと、水に消えたのと、其を印した  
黒い姿に二種ございます。それから、町所番地など  
を明細に書込んだ繪姿は、夜かあけてから印刷され  
たのでせう、活字の濃さとゝもに、白んだやうに白  
まされて、それは霞か霧か、障子紙一重隔てた幻の  
やうに見えるのもあるのです。實際一目見ると悚然  
としますが、云ふに云はれない、威厳と、したしみ  
と、ものゝあはれを知つた情と、可憐と、然も凄さ  
と神々しさとが備はつて居ます。――お心がけに  
て御所持の方はみそなはせ給へかして。・・・

【完】